〔日本の陶磁展によせて〕

乾山作　銹絵染付笹文向付について

今回の展観では当館所蔵の乾山の作品が6件出陳されますが、これから御紹介する「銹絵染付笹文向付、五客」は前の展観案内の項でも少しふれましたように今回が初公開で、これまで他所でも陳列されたことはありません。また、「光琳筆銹絵菊図角皿」も当館では初公開と言えるほどに久々の出陳で、愛陶家の関心を大いに引くものと思われます。

まず、向付についてですが、向付とは言うまでもなく、日本料理の膳部の向側に置き据える、ぬた、山椒味噌、蓼酢などの簡単な料理、又はその容器をさします。膳や折敷の向こうに付けるところから略して向とも、又は先付とも言います。禅家では皆具の内の楪子を用いますが、茶湯では陶磁器類を使うのが普通です。夏季は平皿風のものが多く用いられ、冬季は筒形の深目の深向、蓋付の蓋向などが使われます。豊富な器種を誇る我国の食器の中でも、向付は作者の創意や個性が生々と反映される、特異な存在と云えましょう。

懐石道具を本領とした尾形乾山（1663－1743）も向付は得意としたものの一つで、多数のすぐれた作品を今日に残しています。銹絵、銹絵染付、色絵、色絵金彩など種々の技法を駆使し、また形も皿、鉢、筒、手口付、四方、更に椿・菊・牡丹・百合などの花形と、豊富な形状が見られ、作風は実に変化に富んでいます。それらの多くは乾山名物の型作りで、その斬新で華やかな意匠によって、二条丁字屋町時代の乾山焼の人気者であったようです。

型作りは恐らく古染付や織部に倣ったものと考えられますが、図様はそれぞれ異る絵替りであるなど、乾山の創意が見事に生かされています。従って、乾山の向付は単に面白味のある数物の小品というだけに留まらず、乾山の代表作として知られるものも幾点かあります。例えば、「銹絵染付絵替筒向付、五客」、「色絵桔梗図筒向付、五客」、当館や逸翁美術館蔵「色絵竜田川向付、五客と六客」、五島美術館や福岡市美術館蔵「色絵菊図向付、五客」、湯木美術館蔵「銹絵絵替筒向付、五客」などが挙げられましょう。

この「銹絵染付笹文向付、五客」（図１、２）は各々高さが6.3センチ、口径が12.4センチで、比較的薄作りの碗形です。白化粧地に鉄絵具と呉須を併用して笹文を描き、透明釉をかけて焼成したものです。胎土は僅に赤味を帯び、肌理細かく、粘り気のある良質の陶土で、一見炻器を思わすほどに硬く焼締まっています。笹文は器の見込と外側に数株ずつ、のびやかな筆使いで明快に表わされていますが、意匠は五客それぞれが異る絵替りになっています。いかにも描き慣れたというようなその文様は器形と良く調和して、器を雅味豊かなものにしています。

浅く削り込まれた底は土見せで、その中央に大きく「乾山」の銘（図２）が鉄釉で筆太に書かれていますが、どうしたことか五客の内の一点（図１の中央のもの）だけは白化粧地に書かれています。銘の書体は図柄と同様に画一的でなく、五点それぞれに違っていますが、その張りのある堂々とした筆勢から乾山自筆と思われます。五客一組で伝えられているのが貴重ですが、この向付は岡山県赤穂の旧家、奥藤家に伝来したものと言われています。なお、乾山の研究家で、米国のライス大学助教授のリチャード・ウイルソン博士の調査によって、本品の類品が米国・テキサス州のキンベル美術館に一客（図３）所蔵されていることが判かりました。

ところで、笹文は乾山好みの文様の一つですが、中でも笹に雪を散らした雪笹文の手鉢は乾山の最も有名な作の一つです。乾山写の鉢といえば、大半はこの種の雪笹であるほどに名高い、鳴滝時代の傑作です。しかし、笹文の作例はこれらのものを除くと意外に少いようです。乾山は正徳２年（1711）に鳴滝窯を廃して、二条丁字屋町に移転し、借窯時代に入りますが、この向付はその過渡期の作と考えられます。この作品の出現により、更に乾山の向付の世界が豊かになったと言えましょう。当館には乾山研究に欠かせない乾山自筆の陶法伝書『陶工必用』や、光琳・乾山合作の名品「銹絵山水図四方火入」などが所蔵されておりますが、また新な優品をコレクションに加えることが出来たのは大変喜ばしいことです。この機会に是非御清鑑いただきたく存じます。

（吉田宏志）

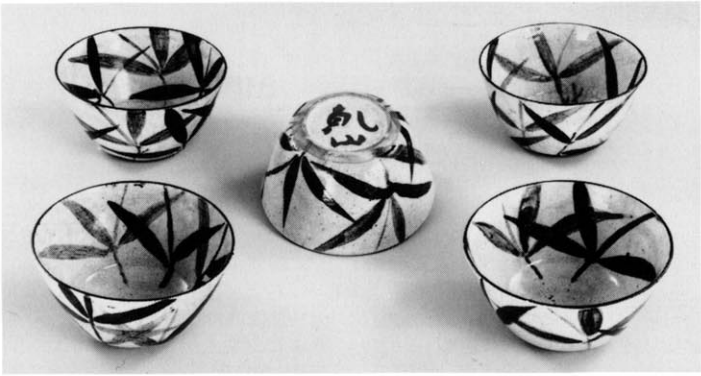


図1 銹絵染付笹文向付　五客　大和文華館蔵
高6.3cm. 口径12.4cm.

図2 銹絵染付笹文向付（見込と底裏の銘）

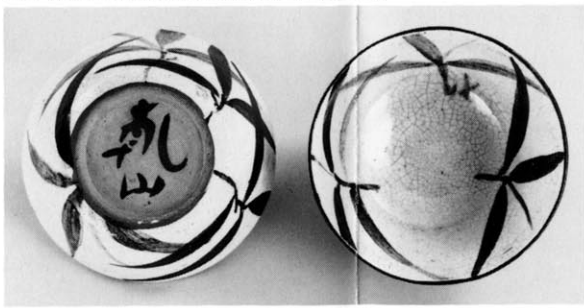
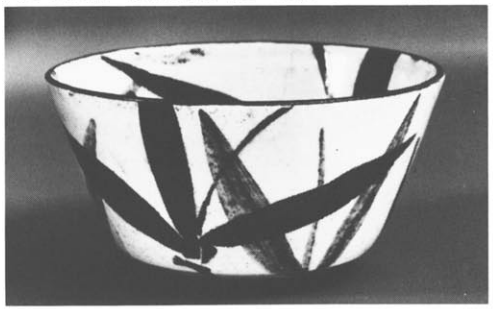


図3 乾山作　銹絵染付向付　米国・キンベル美術館蔵



季刊 美のたより No.82
昭和 63 年 1 月 17 日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.